Reverb（試し読み版）

著　halom

青空
キンドル

20. インタビューを終えて

（編集後記）

数時間に及ぶロングインタビューは終わった。ビルの外に出るとすでに夜になっていた。まるで今の今までまるでまったく別の時間の流れの中にいたような気がする。あるいは何処か別世界と繋がっているようなとても深い井戸の底から、何日かぶりに地上へと出てきた気分だった。久しぶりに見る外の風景が今まで見てきたものとはすっかり変わってしまったようにさえ思える。もしかしたら変わってしまったのは世界の方ではなく、僕の中で何かが切り替わってしまったのだろうか。

話をインタビューに戻そう。

果たして当初の目論見どおりうまく次なるアルバムの全容を解き明

かすことが出来たのだろうか。今回のインタビューが掲載された号はアルバム発売前、と言ってもほんの数日前に書店の店頭に並ぶので、アルバムを聴くまで読まずにいてもいいし、先に読んであれこれ内容を推測するのも面白いかもしれない。

時には個人的な話や、やや下世話な質問になってしまったり、あまり本筋とは関係ない寄り道になってしまう場面もあったが、やはり最後に行きついた場所は最初に目指した正しい所だったと思うし、収まるべきところに収まったと思う。その証拠に僕自身今日の成果にとても満足している。

だがこれが皆が待ちに待ったニューアルバムの全ての種明かしとなったかについては読者の皆様の判断にお任せしようと思う。

少なくとも今回のインタビューによって、謎だらけだった箱を開ける為の何種類かの鍵を得た手ごたえを僕は感じている。それで全ての中身が取り出せるかは分からないけれど。

今回のアルバムは今までのアルバムとは明らかに感触が違っている。

それは一聴しただけで十分分かると思う。

インタビューの中で、僕はまるで未来にあった――出来事について話しているような奇妙な錯覚に陥る時があった。未来のことをまるで過去に起きたことのように話しているみたいな、そんな矛盾したような、奇妙で不思議な感覚だった。

例えばはるか先の未来。

その時代、その街にはどんな音楽が流れているのだろうか。僕らの傍にはどんな音楽があってどういう風に聴かれているのだろうか。

時代ごとに全く新しい音楽や感性が生まれてきたように、想像もつかない音楽で溢れているのかもしれない。或いはあらゆるものをそぎ落とした一種の環境音のようなものになっているのだろうか。今の段階では想像でしか語れない未来のセカイ、だ。

レトロフューチャーなんていう言葉がある。遠い昔に考えられた想像上の未来の世界だ。

かつて僕らの想像の中にあった輝かしい光あふれた未来の世界は一体どこへと行ってしまったのだろう。僕らの今住んでいる現実的な世界とは地続きではない、どこか幻想的な雰囲気を持った世界は結局単なる僕らの空想だけに終わってしまったのだろうか。

はるか先に思えた遠い未来の世界。二十一世紀はもうすでにやってきてしまった。思っていたよりずっとあっけなく。

その中で驚くほど変わったものもあれば、驚くほど変わっていないものもある。空飛ぶ車はなく、僕らは相変わらずバスや電車に乗っている。

この先どうなるかなんて誰も分からない。けれど僕らは一歩一歩、時々立ち止まりながらも歩みを進めてきた。その過程において人の想像力、そこから創り出される音楽、物語は常に大きな役割と意味を持ち続け僕らに様々なものをもたらしてきた。

止まることなく発展進化し続けた音楽、というものはすでに大抵のことはやりつくされているのかもしれない。

音楽はある意味非常にシンプルだ。既存のパーツ、型があり、流れがある。新たなテクノロジーにより新たなテクニックが生まれ、全く新たなものがもたらされる可能性もあるだろう。けれど音楽の根本の形式は不変だ。

とある有名なＳＦ小説では電源スイッチを入れ、つまみを捻れば任意の気分、精神状態を作り出すことが可能となる機械が出てくる。或いは今よりずっと進化したＡＩが、個人個人にぴったりと適合する好みの音楽を、データベースに蓄積した無数の組み合わせパターンから自動生成してくれる未来が待っているのかもしれない。

そうなった場合、既存の音楽。そしてそのスタイルは新たな局面に立たされるのであろうか。既存の立場とまったく違う選択を迫られるのであろうか。それはある意味まるで魔法がとけてしまうかのように、かつて僕らの間で無邪気に信じられ崇められてきた音楽神話の崩壊ともとれるのだろうか。

或いは今後際限なくより過激に。より強く、よりフィジカルに直接

訴えかける、まるで薬物のような音楽が世に溢れるのであろうか。

はたまた本来音楽が担ってきた役割にとって代わられるものが新たに現れるのだろうか。

テレビがラジオを、ＣＤがカセットテープを駆逐したように新たなテクノロジーが既存のカルチャーを破壊するのかもしれない。

数年前はほとんどなかったサブスクリプション（定額配信）がいくつも登場したことなど、音楽と生活との関係やその形態もどんどん変化している。

この変化の結果、音楽の持っていた神秘性、かつての神話が崩壊するのだろうか。昨今の技術の発展を見ているとその予兆は今現在すでに感じられる気がする。ひたひたと背後から迫る足音は段々と大きくなっている。どうにも大きな変革の時は近そうだ。

そんな時勢の中。今回のインタビューで分かった常に新たな。二つとない独自の道を模索し続けた彼らなりの信念、確かな方法論がある。

それはまさに未来の音楽、であると僕は断言する。

決して巷に溢れているような陳腐で誇大なプロモーション的な文句ではなく本質的、実質的な未来型音楽である。

誰よりも今現在をしっかりと見据える技量を持ちながらも、この先の。より良い方向へと向かう未来のビジョンを決して見失わない彼らにこそ可能なスタイルだ。もしかしたらこれがそう遠くない未来のスタンダードな形になっているかもしれない。

そしてなぜ彼らが今、この時。この時代にこの音楽を鳴らすのか。そして鳴らす必要があったのか。インタビューの冒頭でそれが非常に重要なことだと書いたと思う。

過去、現在を含め可能、であった音楽スタイルの音ではなく、まだ見ぬ未来のスタイルで作られた音、だ。これを明らかに意図し、そして試みた恐らく初めてのバンドである。

もし仮に今現在これが理解されることがなかったとしても、受け入れられることがなかったとしても。この先再評価されることが無かっ

たとしても、このアルバムを今この時点で出すこと。それがシーンの先頭に立ち、牽引する者の役割であるのだろう。

かつての姿勢や音楽スタイルを守るのは容易い。そもそも誰の真似でもない自身の独自のスタイルを確立すること自体大変な作業だ。しかしそれをあえて打ちこわし明確な答えも道もない暗闇の中。今現在最先端の――いや。未知のあるいは既知の部品を基に未来のスタイルで再構築する。

その途方もないワーク。その一里塚を越え、彼らはここにこうしてあるひとつの大きな成果を成し遂げたに違いない。だが決してこれに満足することなく、現状に止まることもなく、きっとこれからもその作業をただひたすら黙々と続けていくのだろう。

今回のアルバムには彼らが抱いたビジョンに未来を近づけさせる、そんな力強さがある。

この先起こることは誰も分からない。しかし僕らは常にたどり着きたい場所をきちんと見据え、目指すことは出来る。

彼らが今この時代に新たに綴った一遍の物語。
それはこの先のどこかの地点にある未来の在りようを、確かな実感を持ってありありと思い浮かべることが出来るものであることは疑いようがない。

Reverb (elh 文庫) — halom — 読み物 — Kindle ストア — Amazon
https://www.amazon.co.jp/dp/B07H5XHLKJ